

光源氏の須磨退去

——賢木卷卷末を手掛かりとして——

吉 田 幹 生

葵巻で退位した桐壺院が賢木巻に入って崩御すると、作中世界は

いよいよ右大臣専制の世の中へと移り変わっていく。対する光源氏や藤壺は逼塞を余儀なくされるが、源氏との関係露見を恐れる藤壺は、その懸想を避けるためにも出家を決意し、桐壺院の一周忌にそれを実行に移した。こうして政治的緊張が高まる中、否が応にも自身の行動に慎重さが求められるようになる、さすがの源氏も、

A殿にても、わが御方にひとりうち臥したまひて、御目もあはず、世の中厭はしう思さるるにも、春宮の御事のみぞ心苦しき。母宮をだにおほやけ方さまにと思しおきてしを、世のうさにたへずかくなりたまひにたれば、もとの御位にてもえおはせじ、我さへ見たてまつり棄てては、など思し明かすこと限りなし。

(賢木②一三三―四)

と、冷泉後見としての立場を再認識し、藤壺への無茶な振る舞いを控えるようになっていく。そして、年が明けて、冷泉が無事即位することを願って勤行に励む藤壺の姿に接すると、「大将も、しか見

たてまつりたまひて、ことわりに思す」(賢木②一三八)と記されているように、二人の間にはなにかの共通理解が形成されていくようなのである。

とすれば、読者の関心は、そのような厳しい政治状況下で、光源氏が冷泉後見としてどのように振る舞いこの劣勢を跳ね返していくかに注がれていくことになろう。しかし源氏は、藤壺の出家に続いて、これまで自分を庇護してくれていた左大臣までもが致仕の表を提出したというにも関わらず、朧月夜との逢瀬を再開してしまう。そのため、読者はここに軽い戸惑いを覚えるのではないか。⁽¹⁾この点に注目する呉羽長氏は、源氏が一度は

B大将、頭弁の誦じつることを思ふに、御心の鬼に、世の中わづらはしう、おほえたまひて、尚侍の君にもおとづれきこえたまはで久しうなりにけり。

(賢木②一二七)

と朧月夜への訪問を控えていることから、今問題にしている朧月夜との二度目の密会場面は本来の筋立てにはなく、後に増補されたものではないかと考えた。⁽²⁾たしかに、源氏は五壇の御修法のさいの密会を藤少将に目撃されているのだから、そこから噂が広まるという

展開は十分にあり得たことだと思われる。つまり、世の「わづらはしさ」を避け冷泉後見としての自覚を強めた源氏であったが、かつての臘月夜との密会が右大臣方に恰好の攻撃材料を提供してしまい、その結果、累が東宮に及ぶ前に源氏が須磨に退去してしまう、という展開も可能であったように思われるのである。その方が、過去の過ちのために源氏が糾弾されるという筋立てになり、右大臣方から迫害される被害者としての源氏像はいっそう強まることになる。

しかし、物語はそのような展開を選択しなかった。それは何故なのか。二度目の密会が後に増補されたものであったとしても、そのようにして成り立つ『源氏物語』の論理を考えてみる必要がある。そこで本論では、一見すると不自然に見える賢木巻巻末の叙述を手掛かりにして、光源氏の須磨退去の問題について考えていくことにしたいと思う。

二

最初に確認したいのは、源氏が冷泉後見の立場を自覚してから臘月夜との二度目の密会をする間に記される、文事の場面の読み解きについてである。

政治的劣勢にある源氏のもとに、春の司召しに漏れた三位中将（もとの頭中将）や、閑暇の日々を過ごす博士たちが集まつてきた。彼らは作文や韻塞ぎに興じるのだが、これは右大臣専制下で不遇を託つ人々が源氏を盟主と仰いで自ずと結集したという趣である。「御心にまかせてうち遊びておはするを、世の中には、わづらはし

きことどもやうやう言ひ出づる人々あるべし」（賢木②一四〇）とあるように、彼らの意図とは無関係に、周囲からはそのような集団としてみなされていたらしい。

そうして月日が経過した夏のある日、三位中将が韻塞ぎの負態（まじむ）をすることになった。注目したいのは、四の君所生の次男が催馬楽「高砂」を披露した後に続く、三位中将と源氏との次の贈答歌である。

C「あはましものをさゆりはの」とうたふとちめに、中将御土器
まありたまふ。

それもとけさひらけたる初花におとらぬ君がにほひをぞ
見る

ほほ笑みて取りたまふ。

「時ならでけさ咲く花は夏の雨にしをれにけらしにほふほ
どなく

おとろへにたるものを」と、うちさうどきて、らうがはしく聞
こしめしなすを、咎め出でつつ強ひきこえたまふ。

（賢木②一四二）

三位中将の贈歌は、

高砂の さいささこの 高砂の 尾上に立てる 白玉玉椿 玉
柳 それもがと さむ 汝もがと 汝もがと 練緒染緒（ねり）の 御
衣架にせむ 玉柳

何しかも さ 何しかも 何しかも 心またいけむ、百合花の
さ 百合花の 今朝咲いたる 初花に 逢はましものを さ

百合花の

という「高砂」の詞章を踏まえたものとなっている。傍点を付したように「けむ」が用いられているので、これは右に示したような二段構成で、前段で「玉椿」や「玉柳」を所望したことに對して、後段で「百合花」を對置しながら、どうしてそんな早まったことをしたのか、もう少し辛抱していたら今朝咲いた「百合花」に逢うことができたのに、との感想を述べているのだと推定される³⁾。それを当該場面の状況下に置いてみると、「高砂」の詞章は、「玉椿」や「玉柳」を所望する前段の人物に右大臣方の勢力に阿り^{おち}その恩恵に与る人々が寓されることになり、彼らに對して「百合花」ならぬ源氏を中心に集まった三位中将たちの優位性を言外に響かせることになろう。三位中将は、その「高砂」の内容を踏まえながら、そのように賞美される「けさひらけたる初花（＝百合花）」に劣らない源氏の素晴らしさを称えるのである⁴⁾。

この贈歌が「高砂」に續けて詠まれたのは、その展開を利用しつつ、眼前の光源氏を当意即妙に持ち上げることに三位中将の狙いがあつたからだと考えてよいのではないか。あたかも、光源氏を反右大臣勢力の領袖に担ぎ上げようとするかのごとき趣が感取される。

左大臣家の嫡男として、三位中将はこれまで源氏に對抗心を抱く人物として造型されてきた。当該場面の直前にも「いにしへももの狂ほしきまで、いどみきこえたまひしを思し出でて、かたみに今はかなきことにつけつつ、さすがにいどみたまへり」（賢木②一三九）とされているように、それは変わらない。しかし、父左大臣が

致仕し自身も司召して不遇を託つていふ政治的情勢、及び負態の饑寒という場の要請を踏まえて、ここでは最大限に源氏を持ち上げるのである。源氏がほほ笑んだのも、その変わり身に對してであろう。盃を勧められて「ほほ笑む」場面には、他に

D 中納言（＝薫）のいたくすすめたまへるに、宮（＝匂宮）すこしほほ笑みたまへり。「わづらはしきわたりを」と、ふさはしからず思ひて言ひしを思し出づるなめり。（宿木⑤四一五）

があるが、酒を勧める眼前の行為と過去の言動との差異が笑いをもたらすという仕組みは当該場面にも通じるように思われる。

しかし、反右大臣勢力の結集と噂されかねない状況下で、光源氏がこの賛辞を受納することは危険である。それゆえ、今朝咲いた花はその「にほひ」のほどを十分に發揮することなくもう萎れてしまったらしいといなしつつ、「おとろへにたるものを」と付け加えることで、自分には右大臣勢力に對抗するだけの力はないと切り返しているのである。これは単なる謙遜という以上に、むしろ賛辞の否定と解すべきである。それゆえ、続く「うちさうどきて、らうがはしく聞こしめしなすを」も、「陽気に振舞つて、（中将の歌を）酔いの暴言だとお取りなしになるのを」（新大系）と解するのが妥当であると考ええる。源氏に三位中将歌の意図が見抜けなかつたわけではないが、ここはあえて「酔いの暴言」とすることで贈歌が内包する政治性を無化しようとしているのである。

しかし、いくら源氏が否定しようとも、その超絶的美質は覆うべくもない。

巨みなこの御事をほめたる筋にのみ、大和のも唐のも作りつづけたり。わが御心地にもいたう思しおこりて、「文王の子武王の弟」とうち誦じたまへる、御名のりさへぞげにめでたき。成王の何とかのたまはむとすらむ。そればかりやまた心もとなからむ。

（賢木②一四三）

その場に集う人々が和歌や漢詩で源氏を賛美すると、次第に源氏もその気になってきて、とうとう「文王の子武王の弟」と口ずさむことになる。これは『史記』に由来するものだが、それを源氏が口にすると、文王・武王・周公旦の關係は、桐壺帝・朱雀帝・光源氏のそれに重ねて解釈されることになる。これは、現下の政治的劣勢に對して、自らの出自を根拠に矜持を述べたものだろうが、先の返歌との違いに注意すべきであろう。反右大臣勢力の盟主と目されることを頑なに否定していたのから一転して、ここではそれに応ずるかのような源氏の姿が描き出されるのである。それゆえ、周囲の声に押される形で、右大臣勢力に對抗するものとしての源氏像を浮かび上がらせることが、当該場面での主眼であったのかと思われる。

さらに言えば、「文王の子武王の弟（＝桐壺帝の子朱雀帝の弟）」という源氏の自己規定は、語り手によって「成王の何とかのたまはむとすらむ」と注意喚起されているように、成王（東宮冷泉）との關係に読者の注意を誘うことになる。とすれば、藤壺との一件を知る読者は、前掲Aあたりから大きくなってきた冷泉後見としての自覚が、周囲の声に支えられるようにして、源氏を後押ししている様子をここに読み取るのではないか。口では桐壺帝や朱雀帝との血縁関

係を根拠にしているが、決して口外されることのない冷泉との關係を読者はその背後に感取するということである。

三

前節のように文事の場面を読み解くとすれば、右大臣專制に對抗するような源氏の行動が次に期待されることになる。そこに描かれるのが、朧月夜との二度目の密会場面であった。一度は世の「わづらはしさ」から訪問を控えた源氏であったが（前掲B）、再び朧月夜のもとへと通い始めるようになるのである。

尚侍は正式な皇妃ではないものの、この状況下で朧月夜との關係を再開することは、反朱雀帝の意味合いを帯びざるを得ない。それは、密会が露見した後、弘徽殿太后が朱雀対光源氏という対立の構図においてこの一件を捉え、「何ごとにつけても、朝廷の御方にしてゆるやすからず見ゆるは、春宮の御世心寄せことなる人なればことわりになむあめる」（賢木②一四八）と述べている点からも明らかであろう。

それゆえ、ここには反体制的な雰囲気醸し出されてくることになるが、しかし、注意すべきなのは、そのような源氏の行動が「后の宮も一所におはするころなれば、けはひいと恐ろしけれど、かかることしもまさる御癖なれば、いと忍びて度重なりゆけば、気色見る人々もあるべかめれど、わづらはしうて、宮にはさなむとは啓せず」（賢木②一四三〜四）とされている点である。たとえば、河添房江氏が

そこでは、色好みの対象を奪われた閉塞状況への反発が、右大臣——朱雀体制への政治的叛意としてではなく、「癖」という形で心情的叛乱として定位していることであろう。光源氏としては、女君達との往時の連帯感をとりとめようとしているのであって、それが結果として公的な断罪をみちびくにしても、光源氏自身に罪の自覚が希薄であることは記憶されておいてよい。

と述べるように、物語は源氏のこの行動を、冷泉後見の立場に軸足を置いた政治的反乱としては描き出そうとしていないのである。

それゆえ、文事の場面を朧月夜との二度目の密会と結び付けて読み解くことには慎重でなければなるまい。両者が断絶しているとは言えないものの、賢木巻後半で鮮明になってくる冷泉後見としての源氏の自覚が朧月夜との密会を領導していくという関係にはなっていないのである。言い換えれば、冷泉後見を自覚したから、朧月夜との密会を再開したというように読み解くべきではないということである。

このような展開が、読者に軽い戸惑いを覚えさせることは前述の通りだが、では両者の関係をどのように読み解いていけばよいのか。言うまでもなく、「癖」は光源氏を考えるさいの鍵語であるが、それがこの場面で発動しているということは、源氏自身にさえどうしようもない情念の発露として——すなわち、源氏の意識を超えた次元の行為として——朧月夜との再会が位置づけられているということにほかなるまい。前掲Bにあるように、源氏とて朧月夜との関

係を継続することが自らの政治的立場を悪くするという自覚はあった。しかし、にもかかわらず、源氏は朧月夜との関係を再開してしまっているのである。末摘花巻での「癖」の用例を論じて、秋山氏は「光源氏は、彼の「癖」によって日常の彼から離脱する。「癖」によって、日常の彼の歩調とは矛盾し背反する行動に身を委ねることになるのである」と述べたが、それは当該箇所についても当てはまる。慎重に振舞うべき状況であるにもかかわらず、源氏は自らの「癖」によって自分自身を窮地へと追い込んでしまっているのである。

では、そのことによって、何が拓かれてくるのか。後に明石尼君が「京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻どもいと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻をさへ過ちたまひて、かくも騒がれたまふなる人は、まさにかくあやしき山がつを心とどめたまひてむや」(須磨②二一〇)と語っているように、源氏と朧月夜の一件は、(帝の御妻を過つ)ものとして人々に捉えられていく。そういうものとして物語がこの出来事を定位しようとしているということだが、このとき源氏に重ね合わされてくるのは、『伊勢物語』の昔男や『交野少将物語』の交野少将といった好色な男性像にほかなるまい。とすれば、その発端となる朧月夜との密会露見は、過去の過ち程度のものでなく、反右大臣・反朱雀帝という性格のより明確なものでなければならなかったということになる。言い換えれば、加害者としての要素がここには求められたということである。しかし、それが「癖」によって主導されているだけに、昔男のような全般的な破滅へとは至らず、窮地からの挽回も可能になってく

るのではないか。〈好色人〉と〈生活者〉という二分法を用いて言えは、源氏の日常を打ち破つて描かれる〈好色人〉としての振る舞いが源氏を窮地に追い込むことになる一方で、日常を生きる〈生活者〉としての思考や行動がその窮地から源氏を救い出す可能性も残されているということである。つまり、冷泉後見の自覚を強めてくる源氏像と「癖」に導かれて朧月夜との密会を再開する源氏像とはひとまず区別すべきものであつて、物語はあえて重層的な源氏像を「癖」の語によつて描き出しているのだと思われる。

そして、このことは須磨退去をめぐる自主的退去か左遷流謫かという問題にもつながつていくのではないか。須磨巻が「世のちいとわづらはしくはしたなきことのみまされば、せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさることもやと思しなりぬ」(須磨②一六一)と語り出されているように、源氏が自ら須磨退去を決意したことは動かせまいが、さりとて在原行平や菅原道真・源高明など流罪や左遷になつた人物に源氏が重ねられているのも事実である。三谷邦明氏が、表層においては自発的退去なのだが深層では罪を背負つた流罪として描かれており、これを一義的に決めることは出来ないと思つて指摘した通りなのである⁸⁾。このような重層性と先の問題はおそらく対応するのであり、文事の場面で明示される光源氏と周公旦との重ね合わせが自主的退去の、また朧月夜との密会事件によつて喚起される昔男像との重ね合わせが流離の文脈をそれぞれ形成していくように、物語の展開が仕組まれているのだと思われる。これを図示すれば、

〈生活者〉—被害者—自主的退去—周公旦
 〈好色人〉—加害者—左遷や流謫—昔男
 という二種類の源氏像が須磨退去の文脈を構成していくということである。

四

では、賢木巻巻末で冷泉後見としての自覚を源氏が強めたことは、物語の展開上どのような文脈を構成していくのか。ここで改めて注意されてくるのが、藤壺の出家や左大臣の致仕がそれぞれ「母宮をだにおほやけ方さまにと思しおきてしを」(前掲A)「帝は、故院のやむごとなく重き後見と思して、長き世のかためと聞こえおきたまひし御遺言を思しめすに：」(賢木②一三八)と、桐壺院の意思に背く結果であると記されている点である。

F帝は、院の御遺言たがへずあはれに思したれど、若うおはしますうちに、御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりにしたまふことはえ背かせたまはず、世の政、御心になはぬやうなり。

(賢木②一〇四)

とされているように、右大臣専制の実現とは、生前に桐壺院が思い描いていた体制が頓挫していく過程でもあつた。それゆえ、源氏が冷泉後見としての自覚を強めていくということは、右大臣専制に抵抗して、桐壺院の遺志を継ぐものとしての側面を浮かび上がらせるものであつたと考えられる。賢木巻巻末の政治状況では、その最後

の砦と言つてもよい存在なのであった。

思えば、桐壺院は死を目前に控えて、「大将にも、朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮（＝冷泉）の御後見したまふべきことをかへすがへすのたまはず」（賢木②九七）と、繰り返して述べていたのであった。しかし、桐壺院の遺言を聞いた直後の源氏の反応は記されておらず、院の死後に出家を考えたり藤壺に迫つたりしていることや、「事にふれてはしたなきことのみ出で来れば、かかるべきこととは思ししかど、見知りたまはぬ世のうさに、立ちまふべくも思されず」（賢木②一〇二）といった消極的な姿勢が語られたりしていたことからすれば、源氏の中で桐壺院の遺言は当初それほど大きな意味を持つてはいなかった、ということなのであらう。それが藤壺の出家を契機として冷泉後見としての自覚が強まってくる、それを支えるものとしての遺言の重要性が再認識されてくる、という結構なのかと推測される。

文事の場面ではまだ「文王の子武王の弟」と源氏の矜持が示されるに留まっていたが、須磨退去の直前になると、左大臣の口を通して「昔の御物語、院の御事、思しのためはせし御心ばへなど」（須磨②一六六）が話題になり、源氏を取り巻く政治状況が桐壺院の遺言と乖離していることが明示されるようになる。そして、故桐壺院の山陵を源氏が参詣したさいには、

G 御山に参でたまひて、おはしましし御ありさま、ただ目の前のやうに思し出でらる。限りなきにても、世に亡くなりぬる人ぞ、言はむ方なく口惜しきわざなりける。よろづのことを泣く泣く

申したまひても、そのことわりをあらはにえうけたまはりたまはねば、さばかり思しのためはせしさまさまの御遺言はいづちか消え失せにせん、と言ふかひなし。（須磨②一八一―二二）と、源氏自身が遺言の不履行を問題視するようになっていくのである。

『栄花物語』には、配流の宣旨が下つた伊周が父道隆の墓に参り「かひなき身だに行く末も知らずまかりなりぬれば、なほこの御身（＝懐妊中ノ定子）離れさせたまはず、平らかにと守りたてまつらせたまひて、またかけまくもかしこき公の御心地にも、また女院の御夢などにも、このこと咎なかるべきさまに思はせてまつらせたまへ」（浦々の別①二四四）と助けを求めぬ姿を描くが、これが当時の一般的な感覚であつたにせよ、あるいはこの記述じたいが右の場面を踏まえて書かれたものであつたにせよ、Gの叙述に接した読者が、故院に救済を訴える源氏の姿を想起することは自然な解釈であつたかと推測される。そして、その訴えの根拠になつたのが、遺言不履行の問題であつたと思われるのである。

物語は右に続けて

H 御墓は、道の草しげくなりて、分け入りたまふほどいとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立木深く心すごし。帰り出でん方もなき心地して拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり。

なきかげやいが見るらむよそへつつながむる月も雲がくれぬる
(賢木②一八二)

という源氏の詠歌場面を記す。当該歌については、『細流抄』が「おりふし月の雲がくれたるをみて、故院いかゞ我身を御らんずるにや、月のへだ、るを心のおに、おもひとがめ給ふ也。藤壺の密通の事を思ひ給ふなるべし」としたのに対し、『玉の小櫛』は

月の雲がくる、は、人のかなしみによりて、涙に目のかきくるるによそへて、故院の御心にも、源氏君の此度の御事を、かなしくおぼしめして、涙にくれさせ給ふにやの意也、注に藤壺の密通の事を思ひ給ふなるべしとあるはたがへり、もし其意ならば、前後の詞に、かならずさる意の詞有べきに、一言もなきを思ふべし、

と批判した。『新旧全集』や『源氏物語注釈』はこの宣長説を支持するようだが、どうか。

ここは月が雲に隠れてから浮かび上がってきた面影を目にして、「なきかげやいかが見らむ」と詠んでいるので、雲隠れじたいに拒絶や感応といった故院の意思を読み取ったわけではあるまい。源氏の和歌は「なきかげやいかが見らむ」と詠む点に主眼があり、下三句「よそへつつながむる月も雲がくれぬる」はその理由を示す構成だと考えられるので、雲隠れに何らかの意思を読み取ったのだとしたら、上二句の問いは意味を持たない。何も読み取れなかったからこそ、「いかが見らむ」と詠むのであろう（雲隠れの意図を問うつもりなら「いかが見つらむ」となったはずである）。『新大系』の

源氏の歌。故院（の霊）は今の私をどう思っているだろう。故

院だと思つて仰ぎ見ていた月までも雲に隠れてしまった（故院の心を窺うすべはもはやない。「亡きかげ」は故人の意。「かげ」に月の光の意を掛ける。

という理解が支持されるゆえんである。

では、「いかが見らむ」とは何を尋ねたものなのか。ここは前掲Gの「よろづのことを泣く泣く申したまひても、そのことわりをあらはにえうけたまはりたまはねば」が参考にならう。山陵を訪れた源氏は、故院の生前の姿をありありと思ひ浮かべるものの、それは何も答えてくれず、故院の姿によそえていた月が雲に隠れると、暗闇の中にその故院の面影が浮かび上がってきたので、その面影（「なきかげ」）に対して、先ほど回答の得られなかった「よろづのこと」を問いかけてみるという文脈なのだと考える。とすれば、この訴えの背後にも、Gの場合と同じく、遺言の問題があるということになる。

こうして物語は、桐壺院の遺言からますます遠のいていく右大臣専制の政治状況を浮き彫りにする一方で、その遺言こそが源氏救済の切り札になる可能性を示唆しているのだと思われる。もともと、この段階ではまだそれは単なる可能性でしかない。先の源氏の和歌に対する故桐壺院の反応は記されておらず、源氏に救済の確信があるわけでもない。言わば、物語はこの点への回答を留保したままで、源氏を須磨へと向かわせるのである。

知られるように、この問題が再び物語の表層に浮上してくるのは、右の場面から一年後、明石巻においてであった。

I (源氏)「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや棄てはべりなまし」と聞こえたまへば、(故院)「いとあるまじきこと。これはただいささかなる物の報いなり。我は位に在りし時、過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世をかへりみざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るにたへがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困

じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」とて立ち去りたまひぬ。(明石②(二二九)

夢の中に現われた故桐壺院は、死後「おのづから犯し」があつたために冥界で贖罪の日々を過ごしており現世を顧みる暇がなかつたが、源氏の窮状を見るに忍びずこうしてやつて来たのだと告げる。そこにはのめかされる「内裏に奏すべきこと」とは、遺言のことにほかならない。都へと向かつた故院は、朱雀帝の夢に現れた。

J 三月十三日、雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことも多かり。源氏の御事なりけんかし。

(明石②(二五一))

故院に睨まれた朱雀帝は、「なほこの源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば、かならずこの報いありなるとなむおほえはべる。いまはなほもとの位をも賜ひてむ」(明石②(二五二))と考えるようになり、「春宮にこそは譲りきこえたまはめ、朝廷の御後見を

し、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこといとあたらしうあるまじきことなれば、つひに後の御諫めをも背きて、赦されたまふべき定め出で来ぬ」(明石②(二六二))と、とうとう弘徽殿大后の制止を振り切つて源氏召還を決定するに至るのである。

このように読み解いてくれば、桐壺院の遺言の重さに改めて気づかされよう。賢木巻後半で源氏が冷泉後見としての自覚を強めてくたつた。この遺言の問題を物語の組上に上せるための布石ではなかつたか。前節末で示した二分類に即して言へば、「(生活者)―被害者―自主的退去―周公旦」に関わるところで意味を持つというこゝとであり、被害者としての源氏を救うために、源氏の須磨退去に先立つて、物語は召還のための準備を着々と進めていたということである。

このことを朱雀帝の側からも確認しておこう。¹⁰ 桐壺院は、朱雀帝にも以下のように遺言していた。

K 弱き心地にも、春宮の御事を、かへすがへす聞こえさせたまひて、次には大将の御事、「はべりつる世に変わらず、大小のことに隔てず何ごとも御後見と思せ。齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見たまふる。かならず世の中たもつ相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をさせせむと思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」と、あはれなる御遺言ども多かりけれど、女のまねおべきことにしあらねば、この

片はしだにかたはらいたし。帝も、いと悲しと思して、さらに違へきこえさすまじきよしを、かへすがへす聞こえさせたまふ。

(賢木②九五―六)

源氏の場合とは異なり、「さらに違へきこえさすまじきよし」を繰り返したと記されているのは、朱雀帝にとつて遺言の問題が当初から大きかったことを示している。

しかしにもかかわらず、前掲Fのように、遺言を守ることが出来ないでいた。それゆえ、この事實は、朱雀帝の心に重くのしかかっていくことになる。光源氏が須磨に退去した後、朱雀帝は臘月夜に對して「院の思しのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」(須磨②一九七)と涙ながらに語っており、このような心情が底流していればこそ、前掲Jで故桐壺院が夢に出現して以降、源氏召還へと舵を切ることが可能になったのである(そのさいの「朝廷の御後見をし、世をまつりごつべき人」という表現がKの波線部を踏まえていることは明らかであろう)。はたして、都に戻つて来た源氏が政界復帰すると、

し大后、御なやみ重くおはしますうちにも、つひにこの人をえ消たすなりなむことと心病み思しけれど、帝は、院の御遺言を思ひきこえたまふ、ものの報いありぬべく思しけるを、なほし立てたまひて、御心地涼しくなむ思しける。(落標②二七九)

と、弘徽殿大后とは対照的な、爽やかな姿が描かれるのであった。「ものの報い」云々は、前引した「まことに犯しなきにてかく沈むならば、かならずこの報いありなんとなむおぼえはべる」と対応し

ており、源氏召還を果たしたことで遺言を反故にしないで済んだことによる安堵感を表現している。このような朱雀帝のありようからしても、源氏召還の鍵を握っていたのは故桐壺院の遺言であったことが認められよう。

五

以上、賢木巻巻末の叙述を手掛かりとして、そこに感じられる不自然さを、光源氏の須磨退去を織り成す二種の論理の問題として読み解く方途を模索してきた。ここまでの考察に大過がないとすれば、物語は、「伊勢物語」の東下り章段や六十五段などを読者に想起させつつ貴種流離譚としての須磨退去を紡ぎ出していく一方で、帰京後の冷泉即位を睨みながら故桐壺院の遺言を軸に源氏召還の伏線を潜めていたということになる。しかし、一つの物語展開を二つの論理が同等の力で導いていたとは考えにくい。言うなれば、両者は和歌における二重の文脈のようなもので、どちらかが主文脈を構成しながら、残された他方は、たとえば縁語のように、それぞれの要素が相互に緊密な文脈を構成することなく緩やかに繋がりにあつているのである。

では、物語の主文脈を構成しているのはどちらの論理か。ここで注目されるのは、須磨での源氏のあり方である。須磨退去の直前に藤壺と対面したさいの「かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも、思うたまへあはすることの一ふしになむ、空も恐ろしうはべる」(須磨②一七九)というのが、冷泉誕生の経緯を指していることは疑い得

まい。それゆえ源氏も、「惜しげなき身は亡きになしても、宮の御世だに事なくおはしまさば」(須磨②一七九)と続けるのであろう。

しかし、その「惜しげなき身は亡きになしても」を、須磨での「かくくき世に罪をだに失はむと思せば、やがて御精進にて、明け暮れ行ひておはす」(須磨②一九三)という勤行生活と結びつけるのはどうか。今井上氏も指摘するように、源氏が密通の罪を意識しているのだとすれば「罪をだに失はむ」という言い方はあまりに軽すぎる。それゆえ、源氏が贖罪目的に仏道修行に励んでいたとは読み解けない。言い換えれば、貴種流離譚から期待される贖罪の問題が須磨退去における主要素であったとは見なしがたいことになる¹²。

むしろ、折に触れて無罪を訴える源氏の姿が描かれているように、物語の展開にとっては、源氏が須磨にあることそれじたいが意味を持つものだったのであろう。故院の遺言を守り切れず右大臣の専制を許してしまう朱雀帝との対照性からすれば、その意味とは、故院の遺言を背景に冷泉後見として振る舞おうとする源氏の不遇を読者に印象づけることであつたかと推察される。言い換えれば、孝の問題が須磨・明石巻前後の物語を主導しているということであり、これこそが物語の主文脈を構成しているのだと考えられる。

注1 たとえば、高田祐彦「逆境の光源氏―賢木巻後半の方法―」(『源氏物語の文学史』東京大学出版会二〇〇三年)はこのあたりに「源氏の立場と行動の不整合」を指摘し、日向一雅『源氏物語の世界』(岩波新書二〇〇四年)は「東宮を守らねばという自覚はあつたが、それでもその行動は自重を欠いて一貫性がない。甘えや慢心があつたからだと考えるほか

ない」とする。

2 呉羽長「藤壺構想と朧月夜構想の関わり」(『源氏物語の創作過程の研究』新興社二〇一四年)。

3 「高砂」の解釈や当該場面での働きについては、中田幸司「『催馬楽』「高砂」攷―(寿歌)から(恋歌)への移行―」(『平安宮廷文学と歌謡』笠間書院二〇一二年)鈴木日出男「『催馬楽の恋』(『王の歌』筑摩書房一九九九年)など参照。なお、後段の機能については、中田氏は同一人物による後傳、鈴木氏は第三者による混ぜ返しと把握する。「高砂」そのものの解釈については判断しかねるが、当該場面では朗詠された場合には、右大臣方に靡いた人々(たとえば、春の司召で右大臣方の恩恵に与つた人々)を、当事者ならぬ第三者の立場から揶揄する働きを有することになる。

4 「けさひらけたる初花」には、『白氏文集』「薔薇正開、春酒初熟。因招劉十九・張大・崔二十四同飲」を媒介として「階の底の薔薇(賢木②一四一)も含意されている。この文脈に即せば、薔薇を眺めつつ酒を飲むという『白氏文集』の内容を踏まえて源氏に酒を勧めていることになる。具体的には、結句の「君がにほひ」は「例よりはうち乱れたまへる御顔のにほひ」(賢木②一四二)を指し、「似火浅深紅圧架」ともされる薔薇の赤色にも負けない酔つたあなたの赤ら顔だということになる。採られた顔と赤い景物とを組み合わせるのは漢詩の手法で、『和漢朗詠集』に採られた白居易「醉中対紅葉」(『白氏文集』卷十七)でも「風に臨める杪秋の樹 白酒対へる長年の人 酔貌は霜葉のごとく 紅なりと雖も是れ春ならず」とある。当該歌も勧酒歌としての役割を担っていたと推測されるが、そこに潜ませられた源氏賛美の文脈をここでは重視したい。

5 河添房江「朱雀皇権の〈巫女〉朧月夜」(『源氏物語表現史』翰林書房一九九八年)。

6 秋山慶「好色人と生活者 光源氏の「癖」」(『王朝の文学空間』東京大学出版会一九八四年)

7 注(6)に同じ。

- 8 三谷邦明「須磨流離の表現構造——古注の復権あるいは（引用の織物）としての源氏物語——」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂一九八九年）など。
- 9 光源氏と周公旦の問題については、清水好子「須磨退去と周公東遷」（『源氏物語論』塙書房一九六六年）参照。
- 10 この点については、田中徳定「『源氏物語』における天皇の孝心——光源氏召還と「太上天皇にならずらふ御位」——」（『孝思想の受容と古代中世文学』新興社二〇〇七年）参照。
- 11 今井上「光源氏の「罪」を考える——秘匿の意図——」（『源氏物語を考える』武蔵野書院二〇一一年）。
- 12 今西祐一郎「須磨」（『国文学』一九七四年九月）など参照。
- 13 注（10）田中論文や、田中隆明「光源氏における孝と不孝——『史記』とのかかわりから——」（『源氏物語 引用の研究』勉誠社一九九九年）など参照。

* 本文の引用は、『細流抄』（源氏物語古注集成）『玉の小櫛』（本居宣長全集）を除いて、新編日本古典文学全集（小学館）によったが、表記を私に改めたところがある。

（よしだ・みきお 本学教授）